

曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、
2003年11月、全342頁。

Takeshi SOYAMA

Colonial Taiwan and Modern Tourism, November 2003, 342p.千住 一*
Hajime SENJU

I はじめに

本書『植民地台湾と近代ツーリズム』の目的は、「日本統治下の台湾における近代ツーリズムの形成を説明する」ことにある。周知のとおり、日本による台湾統治は、1895年4月17日に調印された日清講和条約（下関条約）に由来する。日本は、統治下台湾において多面的な開発を推し進めたが、筆者の曾山毅は、特に鉄道、航空、自動車といった交通体系の展開に着目し、その過程で形成された「旅行を量的に拡大しかつ円滑化するような、交通基盤の整備をはじめとした近代的な旅行支援システム」について論じようとする。つまり曾山は、日本統治に先立つ清国統治期における「土着的な従来の旅行のあり方とは明らかに異質な、「日本統治後に立ち上がった旅行支援システムとそれにかかわる旅行」を「近代ツーリズム」（以下、「」を略す）と呼び、この成り立ちについて議論を展開するのである [pp. 17-18].¹⁾

さて曾山は、本書「序章」において、日本人による植民地観光に関する既往研究の動向を整理する [p. 26]。近年、こうした観光形態に限らず、近代日本が獲得した植民地や占領地において生じた観光現象一般を取り上げる研究が、一定の成果をあげつつある。曾山による整理と重複するものもあるが、その現状を地域ごとに示すならば、朝鮮、²⁾ 台湾、³⁾ 「満州」、⁴⁾ 「鮮満」、⁵⁾ 南洋群島⁶⁾ と

いった具合に、昨今の研究動向は「大日本帝国」の版図をほぼ網羅的に扱う。この状況を踏まえると、近代日本における観光現象という課題を取り上げる上で、今や、植民地という視点がひとつの手掛かりとして機能しはじめていることに疑いはない。日本統治下台湾における近代ツーリズムについてまとめられた本書は、そうした潮流の確かな先導役であると同時に、一到達点でもある。発行から2年以上が経過した本書を、近代台湾史を専門としない評者がここで改めて取り上げることの意義は、十分にあらう。

II 本書の概要

まず、本書の概要を章ごとに記す。「序章」では、本書の位置づけが示される。上述した研究の目的に引き続き、本書は台湾における近代ツーリズムを、鉄道を中心とする交通基盤の整備と旅客輸送、旅行目的地や観光地の形成といったツーリズム空間の拡張、山岳地域におけるツーリズム、植民地台湾のツーリズムという文脈における日本と台湾、という4つの諸相から捉えることが宣言される。次いで、本書が社会史ないしは歴史社会学を方法論として採用することや、文献、統計資料、旅行案内、報告書、旅行雑誌などといった文字史料に依拠して目的を達成することなどが明記される。

「第1章 統治基盤の確立と近代ツーリズム」

*立教大学観光学部・助手

では、近代ツーリズム形成の基盤となる、台湾総督府（以下、総督府と略す）による統治体制の確立過程が整理される。まず住民政策として、漢族系住民による抗日活動の制圧と、山地に居住する台湾先住民に対する帰順方策が説明される。次いで、土地制度や貨幣制度などの確立により、欧米および中国系企業の勢力の台湾からの駆逐と、製糖業を中心とした日系企業の台湾進出促進が達成されたことを指摘する。そして、これら総督府による統治基盤の整備により、安定した統治機構の形成、ツーリズム発達の前提となる空間の確定、治安と旅行の安全の確保という、近代ツーリズム形成の基底が準備されたとする。

「第2章 植民地鉄道と近代ツーリズム」では、日本統治下で進められた鉄道事業の実態が、「官設鉄道」および「私設鉄道・手押し軌道」という側面から明らかにされる。前者の官設鉄道は、総督府が1908年に完成させた縦貫線を端緒とするものであり、1920年代までにその路線網を展開させた。後者は、主に日系製糖業企業が敷設した鉄道であり、1907年頃から運行を開始し、当該企業の事業拡大とともに営業キロを増やしていき、1930年頃にピークを迎えた。これら鉄道網の整備により、旅客の高速かつ大量輸送が実現し、特に1930年代には、大幅な利用者数増加が看取されるという。また、旅客輸送網は、台湾西岸地域に集中した。

「第3章 旅客輸送機関としての台湾植民地鉄道」では、鉄道の旅客輸送力、旅客輸送のネットワーク、総督府による旅客輸送振興策が検討される。まず、旅客輸送が貨物と比較して極端に少なかったわけではないことが示され、次いで、官設鉄道と私設鉄道のあいだの接続や連絡輸送といった諸制度の整備過程が整理される。また、総督府鉄道部による振興策について触れ、1930年代以降のジャパン・ツーリスト・ビューローとの協力体制、台湾各地における案内所の設置、各種割引制度の実施、台湾遊覧券の発売といった具体例を挙げる。

「第4章 旅客輸送機関の変遷とツーリズム」では、日本統治以前からあった土着の交通機関の変容過程と、1920年代後半以降の乗合自動車お

よび航空の台頭が取り上げられる。清国統治時代の台湾では、「轎」と呼ばれる駕籠に似た人力に頼る交通機関が発達したが、日本の鉄道建設はその勢力を停滞させた。また、自動車の増加と道路の整備により、1920年代後半から自動車交通が急速に発展する。特に、乗合自動車の出現は、鉄道事業に大きな打撃を与えると同時に、移動可能範囲を拡大させ、「ツーリズム空間」の拡張に寄与した。そして、1930年代には民間航空の活動が活発化するが、旅客輸送全体に占める割合は僅少であったという。

「第5章 植民地台湾の旅行目的地」では、観光地など旅行目的となる場所に関する考察が行われる。まず、清国統治時代の宿泊施設の概要や、日本人経営の宿泊業の進出が述べられる。次いで、『台湾鉄道旅行案内』の分析により、そこへ記載される「観光・視察対象」が経年的に集積され、特に1930年代以降は、観光やレクリエーションの対象が山岳地域に「発見」されていったことなどが明らかにされる。また、1927年に台湾日日新報社が実施した景勝地に関する人気投票「台湾八景」の結果から、台湾における観光地認識のあり方が素描される。そして、台湾では北投温泉以外に大規模開発が見られず、周遊ルートも未整備だったため、都市部が最も誘因力のある場所であったとする。最後に、1935年に台北で開催された「始政四十周年記念台湾博覧会」の存在に着目し、多くの台湾人が各地から博覧会に参加したことにより、彼／彼女らの旅行経験が活性化された」と指摘する。

「第6章 山岳地域におけるツーリズム空間の形成」では、「先住民の脅威」が取り除かれた後の山岳地域が、いかにツーリズム空間として転化していったのかが説明される。山岳地域を安全に旅行できるようになったのは1923年以降のことであり、時を同じくして、山岳道路が多く建設され、『台湾鉄道旅行案内』への山岳地域の記載も増加する。これにより、山岳地方の観光開発が促進され、日月潭や阿里山では、先住民自身の観光対象化が見受けられるようになった。そして、1930年代以降は、レクリエーション性の高い登山やハイキングなどの愛好者が増加し、また、先

の「台湾八景」の選定や国立公園の指定などにより、山岳レクリエーションへの社会的関心が喚起されたとし、結果、ツーリズム空間が山岳地域へ拡張したとまとめる。

「第7章 ツーリズムにおける〈台湾〉と〈日本〉」では、内地における植民地観光や台湾観光の位置づけ、日本から台湾に「移植」された温泉遊興文化、1930年代における台湾人旅行者の台頭について論じられる。まず、1924年に創刊された旅行雑誌『旅』の記事を分析し、内地で紹介される植民地観光は「鮮満」を対象とするものが多く、台湾は、他の植民地を含む周遊ルートには組み込まれなかったとする。次いで、北投温泉を事例に、そこへ日本的な温泉文化が移入され、「日本の文化租界」としての性格を強めていった過程を整理する。そして、1930年代以降に顕在化していく、台湾人鉄道利用者数の増加、日本人とは異なる台湾人旅行者の行動特性などが指摘される。

「終章」では、以上で展開された議論の総括が行われる。まず、各章において示された知見がまとめられる。次いでこれを受け、近代化、台湾総督府の政策、日本の文化的ヘゲモニー、台湾側の要素という4つの視点から、台湾における近代ツーリズムの形成を規定した要因に関する再整理を施す。

Ⅲ 本書へのコメント

ここでは、本書の意義や発展可能性などについて記す。まず本書の意義を簡単に述べるならば、何よりも本書は、日本統治下台湾における近代ツーリズムの成立を、統治体制の確立、製糖業を中心とする産業の展開、官民鉄道網の整備という諸要素の結節点上に浮かび上がらせることに成功している。のみならず、日本統治に先立つ清国統治時代からの連続性を意識しながら、植民地として台湾社会が成熟していくなかで、いかに近代ツーリズムの諸相が変遷していったのかについて、豊富な文字史料に依拠しながら実証的に明らかにした。このような本書の成果は、「ヨーロッパで誕生した近代ツーリズムに、非欧米地域がデスティネーションとして包摂される」という「帝国主義

的ツーリズム」観だけでは、「非欧米地域における近代ツーリズムの発達を十分に説明することはできない」という、近代観光をめぐる曾山の問題意識に呼応するものであったと言えよう [p.18]。

また本書は、日本統治下台湾における社会構造の変容過程を、近代ツーリズムという視点から読み解くことも可能にする。例えば、山岳地域や山地先住民が観光化されていく様子は、台湾という空間、そして被統治民たる台湾住民が均質的な存在ではなかったという点だけではなく、日本による統治が継続されるに従い、その差異が日本統治時代以前とは異なる枠組みで再編成されいったことを明らかにする。また、1930年代以降、台湾人による近代ツーリズムへの参加が活発化したという状況や、日本統治によって達成された近代ツーリズムに依拠しながらも、単に日本人が行ってきた観光形態をなぞるだけではなく、自らの社会観を反映した「楽しみ方」をそこで模索していったという台湾人の姿も、間違いなく日本統治下台湾社会の一側面なのである。

そして、近代メディアと観光現象の関係に興味を持つ評者にとって、本書の白眉は第5章で示された知見の数々に尽きよう。例えば、総督府鉄道部が編集した『鉄道旅行案内』と『台湾鉄道旅行案内』における「観光・視察対象」の項目を検討するなかで、近衛師団および北白川宮関係史跡、戦跡、戦死・殉職者史跡、神社といった日本による台湾領有の歴史に関わる「名所」についての記載数が、特に1940年代に入ってから急増することが明らかにされる [pp.187-195]。これは、当時の時局を踏まえると非常に興味深い現象であると言えるが、経年的にどの場所が新たに「観光・視察対象」として書き加えられていったのかが明示されておらず、些か残念ではある。

また、1927年の台湾日日新報社による「台湾八景」選定に関する指摘も重要である。これは、「すでに名所としてその美を詠われた場所だけではなく、埋もれた景勝地の発掘をめざす」ために実施された一般人参加の人気投票であり、その途中経過は、『台湾日日新報』紙上で連日報道された。結果、最終的な投票数は3億6千万票に達したが、そのほとんどが計画的な組織票であったと

いう [p.200]. これら「台湾八景」をめぐる一連の熱狂ぶりを「メディアイベント」という視点から読み解くことはもちろん可能であるし、また、植民地台湾において『台湾日日新報』というメディアが占めていた位置づけを考察することもできよう。しかし、最も気をつけるべきは、多数の台湾人が投票に参加したにも関わらず、「台湾八景」審査委員会が総督府関係者を中心とする22名の日本人によって構成されていたという事実である。そしてそこでは、「神域・台湾神社」と「霊峰・新高山」を「別格」として扱うことが満場一致で可決される [p.203]. このように、特定のメディアが観光現象と関わる際に発動される、ある種の「力学」を看過してはならない。

さて、本書で示された知見のなかには、今後さらに議論を深め得る課題がいくつか見受けられた。まず、台湾を含めた日本の植民地と内地間、そして各植民地間を結ぶ観光を媒介としたネットワークの存在についてである。本書では記述が分散しているが、内地と台湾における連絡運輸制度の確立 [pp.102-103], 鉄道省発行の内地各所をめぐる遊覧券への台湾の参入 [pp.108-109], 1940年前後に大日本航空が展開した、横浜、福岡、朝鮮、満州、台湾、南洋群島を結ぶ航空路線に関する指摘など [p.165], 兎角峻別されて論じられがちな内地と植民地を、線もしくは面で捉えるための手掛かりがいくつか示されていたように思える。また、こうした視点より、当時の交通および交通網が帯びていた「近代性」あるいは「政治性」といったものを問うていくことは可能であろう。

次に、植民地から内地へ出掛けていくという観光の形態についてである。台湾では、山地先住民に対する宣撫政策の一環として、選抜した先住民を内地各所へ連れて行く「内地観光」が、1897年から1912年にかけて計5回実施されたという [pp.46-47]. 既往研究によると、総督府が主導した内地観光のなかには、山地住民以外が参加した事例もあるようだが、⁷⁾ いずれも、内地観光を中心的課題として取り上げ論じているわけではなく、その実態については未だ不明な部分が多い。議論が単純化されることを恐れずに言うならば、

為政者が新たな被支配者を自らの統治体制のなかに取り込んでいく過程で、内地観光という手段が採用されたという事実は、近代における観光現象のあり方を論じる上で見逃すことのできない側面である。

本書の発展可能性をもうひとつ指摘するならば、それは、日本統治時代に成立した観光資源の現在についてである。曾山も、今日の台湾における国立公園制度が日本時代のそれを踏襲したものであると述べているように [p.325], 日本統治時代から現在に至るまで連続してみられる近代ツーリズムの「痕跡」が存在するはずである。例えば、日本陸軍が開発に関与し、1923年に当時の皇太子が行啓に訪れたという北投温泉は、今日においても活況を呈していると聞く。日本統治から脱却した台湾が、被統治時代から何を受け継いで何を破棄し、現代観光の文脈のなかでこれらの「遺産」をいかなるかたちで再配置し、どのような枠組みにおいて「消費」しよう、あるいはさせようとしているのであろうか。台湾に限らず、観光現象を通じて旧植民地における近代と現代の連続性を明らかにすることは十分に可能である。

最後に、本書に対する疑問をいくつか列挙しておく。まず、台湾における近代ツーリズムを利用したであろう日本人の「質」が、内地からの来訪者も含めて今ひとつ不鮮明であったように思える。本書ではこの部分に関する記述が散見されるものの、日本統治下台湾において形成されていたと考えられる日本人社会の重層的な構造が全体的には見えにくい。総督府による統治体制、製糖業を中心とした日系企業の進出、その他の要因が折り重なって作り出された社会は決して均質ではなく、また、台湾における全ての日本人が等しく近代ツーリズムの「恩恵」に与れたわけではないはずだ。

そして本書は、特に1930年代以降、「台湾人」が近代ツーリズムへ参画していったとたびたび言及する。文脈からすると、ここで言う台湾人とは漢族系住民のことであると思われるが、例えば山地先住民は、こうした潮流から一切除外されていたのであろうか。また、漢族系住民にしても、上記の日本人と同様、社会的地位や居住地域などに

よってかなりの多様性を持っていたはずである。さらに、統治機関たる総督府によって作り出された近代ツーリズムという「装置」に、被統治者がアクセスするという行為は、彼／彼女らにとってどのような意味を持ち得たのであろうか。そもそも総督府が、日本人以外の台湾内における移動を、特に奨励／抑制するような立場にあったかどうかも疑問である。

敢えて言うならば、本書は、台湾における近代ツーリズムのハード面を重点的に論じてきた感が強い。こうした作業に次いで求められるのは、その利用者、あるいは「観光客」の質に関わる部分であろう。特に、台湾における近代ツーリズムの時系列的な変遷に着目するのであれば、日本人、台湾人を問わず観光客たちが属する社会の詳細な変動についても同時に把握されるべきである。史料の制約もあるだろうが、今後、これら両者の相互関係がより明確にされることを期待したい。なぜならこの作業は、特に曾山が第7章で依拠しているような、新しい観光客の発生を余暇時間と余剰所得の増大から説明しようとする、「古典的」な枠組みを修正し得る可能性を持つからである。

なお、本書には、近代ツーリズムという用語の他に、ツーリズム、観光、旅行などといった類義語が頻出する。本書の性格上、そして、「観光」と一般に呼称される現象の曖昧さを踏まえると、語句選択に際する曾山の苦労は理解し得るが、正直なところ、通読して混同する場面が少なからずあった。もっともこれは、読み手の能力に起因する問題であるのかも知れないが、

IV おわりに

さて本書は、2003年3月に本学へ提出された博士學位論文『日本植民地下の台湾における近代ツーリズムの形成』を土台としているが [p. 327]、曾山は「あとがき」において、學位論文執筆の際の苦悩をこのように吐露する。「自分が進めている研究が観光学なのか日本植民地研究なのか、あるいは台湾研究なのか、わからなくなることが多かった」と。そして、「観光学は守備範囲の広い領域学ではあるが、固有の研究枠組みや方法論は

存在していない、と私は考えている。少なくとも學位論文となれば、方法論をどこかで借りてこなさなければならなくなる。本書では、それは歴史研究ということだったと思う」と続ける [p. 328]。

ここに看取されるのは、「観光学」と呼称される学問の「学際性」をめぐる問題であろう。言うまでもなく、「観光学」は「学際性」との組み合わせにおいて喧伝される傾向が強い。しかし、この「学際性」は、上記後段で曾山が示した認識を前提にして初めて獲得され得るものである。つまり、曾山のような立場から観光現象を扱う研究の総体をもって「観光学」は成立するのであって、「学際性」とはその結果に過ぎない。敷衍するならば、こうした意識の下で導き出された知見は、「観光学」の枠を容易に飛び越え、日本植民地研究としても台湾研究としても十分に認知される可能性を持つ。⁸⁾

今後、「観光学」に対する意識の濃淡はあるにせよ、日本近代史、植民地、占領地、観光現象をキーワードとする研究の進展は加速しよう。またそこでは、本書の先駆性が常に振り返られるに違いない。曾山が「観光学」と真摯に向かい合った末に辿り着いた頂は、確かに高く、そして鋭い。

注

- 1) 『植民地台湾と近代ツーリズム』からの引用に限り、[] に所収ページを記載することにより出典明記とした。
- 2) 李 (2004).
- 3) 神田 (2003). 松金 (2001).
- 4) 荒山 (1999, 2003). 高 (2002).
- 5) 有山 (2002).
- 6) 千住 (2004, 2005 a, 2005 b).
- 7) 洪 (2001). 松田 (2003).
- 8) 例えば、本書の存在は、植民地期台湾の文化研究に関する動向整理のなかで言及されている。宮本 (2005: 198-199).

参考文献

- 荒山正彦 1999 「戦前期における朝鮮・満洲へのツーリズム：植民地視察の記録『鮮満の旅』から」(『関西学院史学』26, 1-22頁).
- 荒山正彦 2003 「満洲観光の軌跡：20世紀前半期における中国へのまなざし」(阪倉篤秀編『さまざまな角度からの中国論』晃洋書房, 167-182頁).
- 有山輝雄 2002 『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館.
- 高媛 2002 「「楽土」を走る観光バス」(『岩波講座近代日本

- の文化史6』岩波書店, 215-253頁).
- 神田孝治 2003「日本統治期の台湾における観光と心象地理」(『東アジア研究』36, 115-135頁).
- 洪郁如 2001『近代台湾女性史:日本の植民地統治と「新女性」の誕生』勁草書房.
- 李良姫 2004『金剛山観光の文化人類学的研究』広島大学大学院国際協力研究科博士論文.
- 松田京子 2003『帝国の視線:博覧会と異文化表象』吉川弘文館.
- 松金ゆうこ 2001「植民地台湾における観光地形成の一要因:嘉義市振興策としての阿里山観光」(『現代台湾研究』22, 110-124頁).
- 宮本正明 2005「植民地と「文化」」(『年報日本現代史』10, 195-210頁).
- 千住一 2004「「観光」へのまなざし:日本統治下南洋群島における内地観光団をめぐって」(遠藤英樹・堀野正人編『「観光のまなざし」の転回:越境する観光学』春風社, 132-146頁).
- 千住一 2005 a「日本統治下南洋群島における内地観光団の成立」(『歴史評論』661, 52-68頁).
- 千住一 2005 b「軍政期南洋群島における統治政策の初期展開と第2回内地観光団」(『日本植民地研究』17, 34-49頁).

